

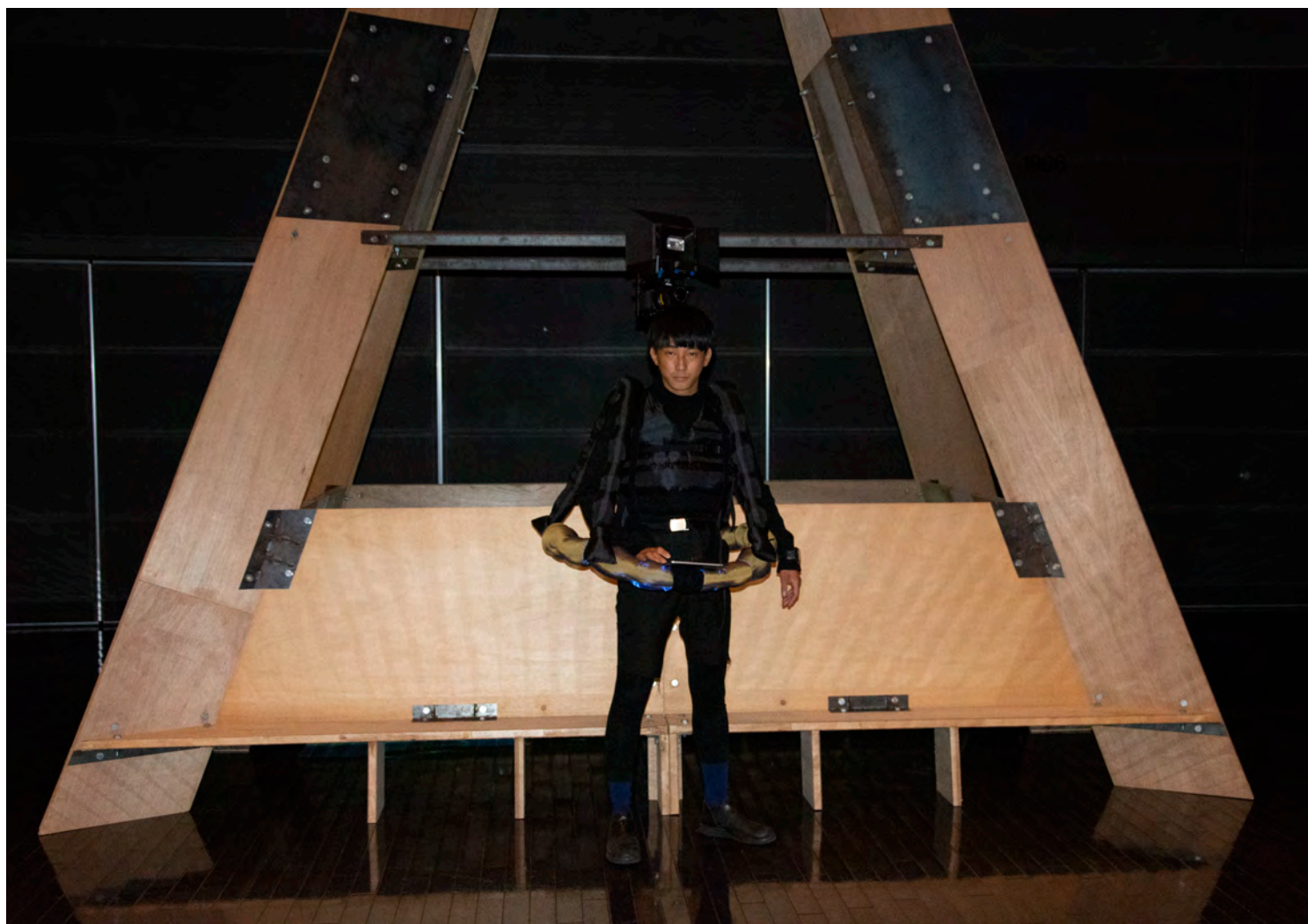


イトム
前田耕平

maeda kohei

2018,11,9 fri. _ 25 sun.

Gallery PARC



《A moon》 2017, performance 「Shift-Shift」 神戸アートビレッジセンター(兵庫)

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]では、2018年11月9日(金)から11月25日(日)まで、前田耕平による個展「イトム」を開催いたします。

2016年に京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻構想設計を修了後、京都を拠点に活動する前田耕平(まえだ・こうへい/1991年・和歌山生まれ)は、人と人、人と自然などの物事の「関係・距離」に興味を向け、自らの身体・体験を手がかりに、これまで映像やパフォーマンスなど様々なアプローチによる探求の旅を続けています。

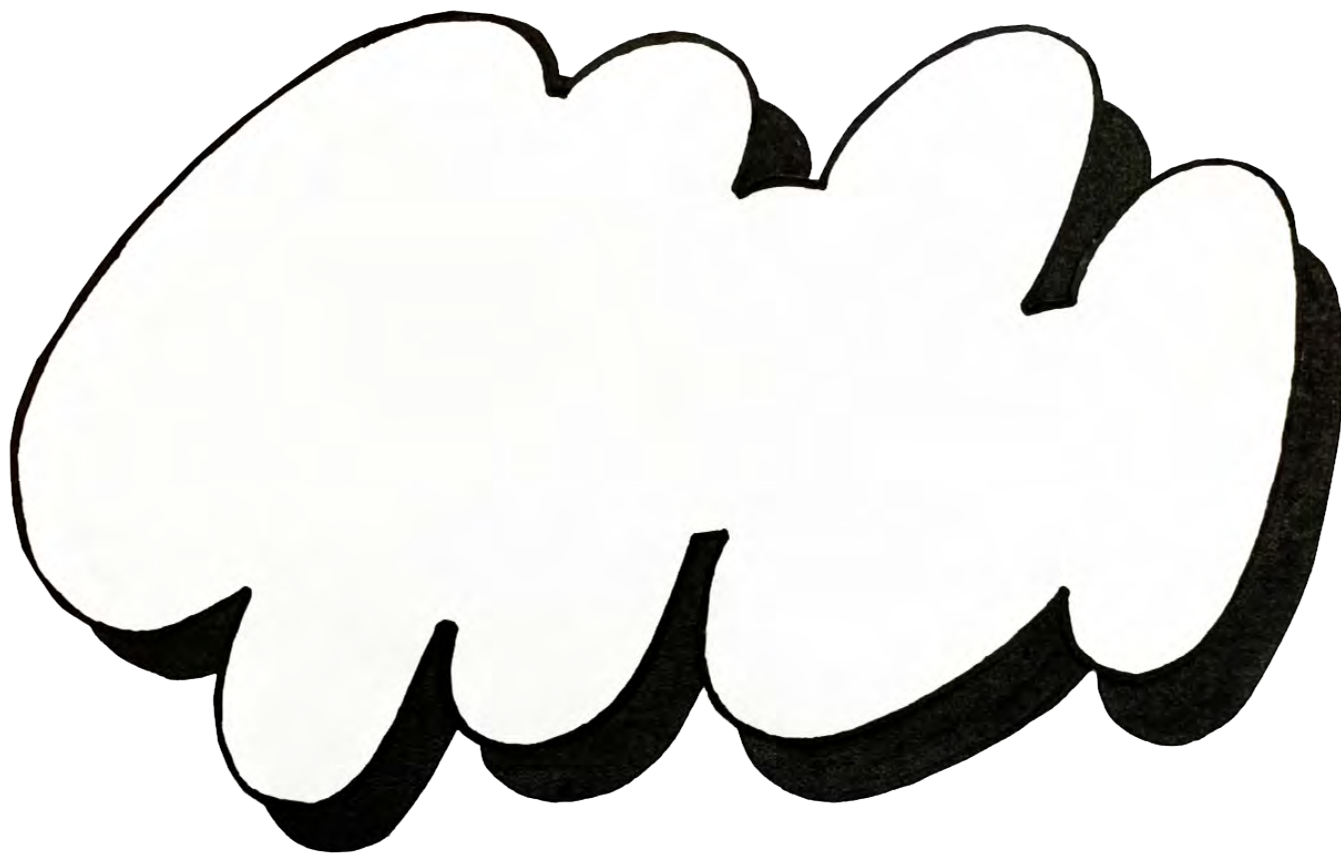
「この過程で巻き起こる現象を作品と呼ぶことにする。」とする前田は、こうした作品制作のみならず、南方熊楠(みなかた・くまぐす/1867-1941年/博物学者、生物学者、民俗学者)の思想を巡り、多くの人と対話をおこなう“まんだらぼ”プロジェクトや、アーティスト・宮坂直樹と立ち上げた文化機関「Midnight Museum」により、展覧会キュレーションに取り組んでいます。前田は作品・展覧会・パフォーマンス・レジデンスで訪れた土地などを、人や物事との出会いや関係が生じる「場」として捉え、そこに起こる様々な事象を作品へとリレーションさせる、まるで「運動」のような制作プロセスにより、多様な活動を見せています。

本展において前田は、この距離への思考を「内と外」あるいは「部分(一部)と全体」といった構造に置き換え、その狭間に起こる事象を捉えようとしています。

例えば、建築物を全体と捉えると鑑賞者はその内部に在り、また全体の一部としても捉えることができるでしょう。あるいは建築物の外に世界は在り、建築物は全体の一部と捉えることもできるでしょう。こうして、内に内に、外に外にと視野や感覚を広げた時、「内と外」「部分(一部)と全体」の狭間にある距離とは何を指すのでしょうか。またそこに距離は存在し得るのでしょうか。そして、その視点である自分はどこに存在するのでしょうか。

本展で鑑賞者は、俯瞰して見ているものに近づき、さらに内へと視点を進めることと、等身大の視点から離れ、俯瞰で眺める視点を繰り返して体験することになります。それはまた、自らが部分(一部)であることと全体であることが入れ子となる体験を繰り返すことでもあり、その中で次第に極や境界、距離、あるいは自分の消失を体験することになるかもしれません。

会期初日となる2018年11月9日(金) 18:30より【オープニング・イベント】として、パフォーマンス「前田耕平×大巨人」を開催します。暗闇となった展示室の中で、ストリートパフォーマーの大巨人が発するドラムの音と、前田の身体表現により、誰にも見えないパフォーマンスが行なわれます。二人のパフォーマンスから引き剥がされる残る「一部」は、会期中の会場に痕跡として「不在」を示します。



本展の周知・広報にご協力頂ける際に、広報用画像をご用意しております。本リリース掲載画像からご希望の画像番号および掲載媒体情報を明記の上【info@galleryparc.com】迄ご連絡ください。尚、個人の鑑賞および利用を目的とする場合は、画像の貸出しはお断りしておりますのでご了承ください。

展覧会名 イトム

出展作家 前田 耕平 maeda kohei

<http://koheimaeda.tumblr.com>

会 期 2018年11月9日[金] — 11月25日[日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで

イベント パフォーマンス [前田耕平×大巨人]

2018年11月9日[金] 18:30~

暗闇となったの展示室の中で、ストリートパフォーマー大巨人が発するバケツドラムの音と、前田の身体による誰にも見えないパフォーマンス。

料 金 無料

内 容 [インスタレーション]

人と人、人と自然などの物事の「関係・距離」に興味を向ける前田耕平による、彫刻、映像、パフォーマンスなどによるインスタレーション。会期初日となる11月9日(金)には、ストリートで活動するバケツドラマー“大巨人”とのコラボレーションによるパフォーマンスをおこなう。

会 場 Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・パルク] 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F MAP

ア ク セ ス 地下鉄烏丸線「四条」駅・阪急京都線「烏丸」駅22・24番出口より徒歩7分。地下鉄烏丸線・地下鉄東西線「烏丸御池」駅より徒歩7分。室町通・六角通 北東角 室町通側入り口より2Fへ

問い合わせ Gallery PARC (正木・村田・岡田) 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F

TEL= 075-231-0706 FAX= 075-231-0703 MAIL= info@galleryparc.com HP= www.galleryparc.com

前田 耕平 Maeda Kohei

<http://koheimaeda.tumblr.com>

statement

人や自然、物事との距離をはかろうとすることは、
無謀で途方もない旅のようなものだ。
この過程で巻き起こる現象を作品と呼ぶことにす
る。目的地にたどり着かなくても、徐々にその存在
を獲得していこう。
作品に介入する自身の姿は、登場人物であり、ま
た対象との関わり方とその態度の表れである。

近年の活動に南方熊楠の思想を巡る、“まんだら
ぼ”プロジェクトがある。

C.V.

1991 和歌山生まれ

2016 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画
専攻構想設計 修了

個展

2016 「前田耕平アワー 夜のまんだらぼ」
KYOTO ART HOSTEL kumagusuku (京都)

2015 「TIP OF NOSE」
京都市立芸術大学 小ギャラリー (京都)

グループ展

2018 「Shift-Shoft」
神戸アートビレッジセンター (兵庫)

2017 「Flow and Stock」
元・崇仁小学校 (京都)

2017 「MARA マラ」
VOU (京都)

2016 「日韓作家交流展 SHOEBOXの世界」
清州美術館 (韓国)

2016 「fabric, light and dirty」
ARTZONE (京都)

レジデンス

2018 Artist-in-Residency Compeung
(タイ チェンマイ)

展覧会企画

2018 「Exercise for Death 2」
Midnight Museum (京都)

2018 「Shift-Shoft」
Midnight Museum (京都)

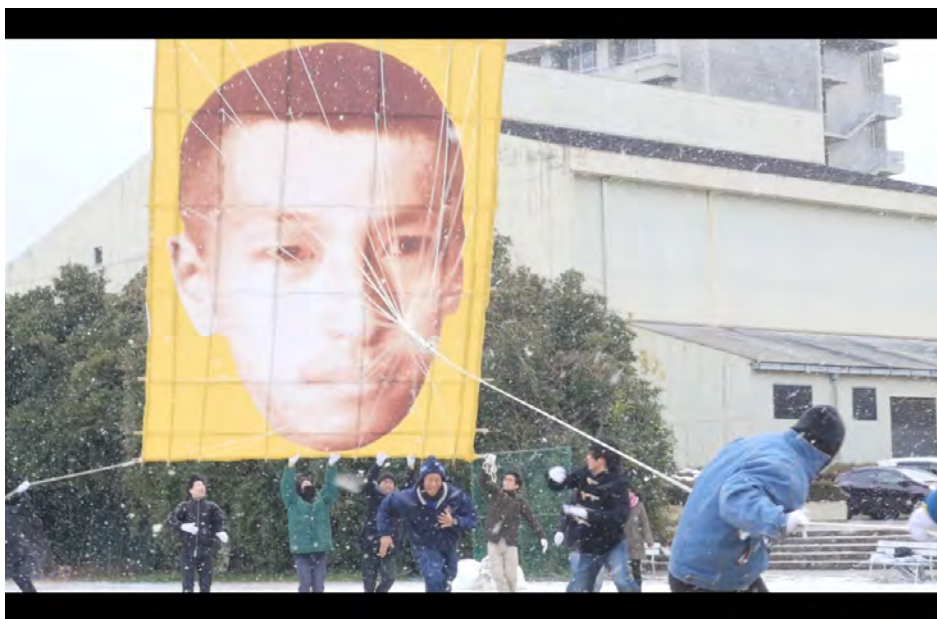
2017 「Exercise for Death」
ARTZONE (京都)

賞

2017 京都市立芸術大学修了制作展 同窓会賞



《まんだらぼプロジェクト》 2016, ART-HOSTEL kumagusuku, Performance



《Over to you》 2017, Video 3'55"



《熊楠の対話》 2016, Performance

展示会の搬入で、トラックの荷台に一人で乗り込んだ時のことだ。

荷台は高さ2m、縦横3m×2mの箱型で、荷台は走行中、自動的に消灯する仕組みだった。

30分程、暗い箱の中に閉じ込められた。

暑さが心配で、暗所に不安はなかった。こういうときは、目が慣れてくるのをしばらく待てばいい。

その後、目を大きく見開いてみたりしたが、目の前には何も現れてこなかった。

見えた？のはさっきまで見ていた光の残像か、内視現象における蛍光色の虫のようなものだった。

雨の侵入を防ぐため荷台には空気孔や小窓が見あたらず、わずかな光の差し込みさえ許さない暗闇だったのだ。

携帯電話でライトをつけたらよかったが、なぜだか少しの怖さと一緒に耐えて見ようと思った。

レジデンスでタイに行ったときに、チェンライの洞窟にサッカーチームの少年12人とコーチの計13人が9日間閉じ込められた話を聞いた。

地元サッカーチーム「ムーパ(野生のイノシシ)」の子供達は普段から遊び場として洞窟に入っていた。

現地ではこの洞窟がある山の形が、女性の寝姿に似ており、洞窟の位置は女性の胎内に当たるらしい。

一説ではこの女性はナンノーン(タイの神話上の姫)だとされている。

この洞窟は死んだナンノーンの精霊が何百年も宿り続けているのだとか。

サッカーチームが行方不明になった当日、彼らを率いる元僧侶のコーチは、子供たちの精神修行を兼ね、洞窟に入ったらしい。しかしその日は大雨で、洞窟内の水かさが増していった。

引き返せなくなった彼らは、奥に進むしかなくなったのだ。

逃げ込んだ場所は洞窟の入り口から約5キロ離れた地点だった。

懐中電灯が切れ、少年とコーチは本当の暗闇を体験することになった。

水や食料はなく、洞窟の天井から垂れる水を飲み、乾きを凌いだという。

洞窟の外では精霊にお詫びの祈りを捧げる儀式が連日連夜行われていた。

そして後に少年とコーチは無事に救助された。

洞窟の闇の中、普段太陽の下で生きる人間は真っ先に昼夜の存在を失ってしまう。

やがて時間の感覚がなくなり、不安や孤独に襲われていくだろう。

暗闇で頼りになるのは皮膚から伝わる身体感覚だ。

感触と記憶を頼りに、自分の周囲を確かめていく。

しかし脳で覚えている物体の形や色などは日の経過と共に、曖昧になり、触れているものの存在は不明瞭になる。

これは同じ文字をしばらく眺めていると、その文字自体の構造がわからなくなるゲシュタルト崩壊と似ている。

この現象が恐ろしいのは、自分の存在も見失ってしまうところだ。

洞窟の闇の中では、触れている自分の体でさえ、不確かになってしまうだろう。

しかし少年達とコーチは祈りに近い身体感覚で、“それ”を自分自身として顕在化させたのだ。